

News Letter



人に踏まれない場所のツメクサ。株は直径10 cm程度になる。

ご存じの方も多いと思うが、私はいわゆる巨漢（約0.1t）である。不思議なもので自分が大きいと、普通の大きさの人以上に小さい生き物が愛らしく思えるようである。今日の話は、その小さい生き物についてなのだが、動物ではなく植物である。

それはツメクサというナデシコ科の1～2年草である。実に小さな植物で地面にへばりつくように生え、ソメイヨシノの花が盛りをすぎた頃にハコベに似た小さな小さな白い花を付ける（図鑑での花期は3月～8月、葉の形が切った爪に似ている）。全国各路傍や空き地に普通に見られるが、この植物はいわゆる都市型生物といえるもので、人間が作り出した人工的な環境にも良く適応して、けなげに花を咲かせる。

私の住んでいる世田谷区の用賀という町に、用賀駅から世田谷美術館に至る用賀プロムナードと呼ばれているきれいな緑道がある。その平板舗装は目地をモルタルで埋めていないために、春になると舗装の目地からツメクサを含めた多くの雑草が生えてくる。おもだった種としてツメクサ、スズメノカタビラ、ナズナ、ウスアカカタバミ、セイヨウタンポポ、コハコベ、ハハコ

グサ、ノゲシ等がある。これらは、年中人々に踏まれる可能性がある舗道上で、昼間は高温と乾燥、夜は冷え込みに耐えて、地味だがよく見ると可憐な花を咲かせている。

ツメクサをはじめ、これらは生えている場所によってずいぶん大きさが異なる。動物は種によっておおむね大きさが決まっているが、植物は動物に比べていかげんというか、幅があるというか、同じ種でも生えている環境によって著しく大きさが変わる。用賀プロムナードのツメクサも人に踏まれない場所では直径10cm程度の株を作るが、よく踏まれる場所では直径1 cmにも満たない株がある。そうした小さい株は、まれに1輪程度の花を付けることもあるが、付けられずに冬を迎える個体もある。

概してこの用賀プロムナードの平板の目地のような場所に生育する都市型の植物は、その本来の生育地の個体に比べて小さく、無意識に作られた盆栽のようなもので本当に小さくて愛らしい。しかも

幅4 mmの

野生空間

～街角の足元から～



よく踏まれる場所のツメクサの株は、直径1 cmにも満たない。

彼らの生育は、それを歓迎されているわけではなく、踏みつぶされるか近い将来維持管理の名のもとにむしり取られてしまう個体が多い。それでも何とか種子を目地の4 mmも幅のない土に残し、種子を作れなかった個体は枯れて土を肥やし、次の年にはまた新たな生命の息吹を芽生えさせる。私はこの緑道に植栽された植物よりも、これらの小さな小さな生命の営みに、尊さと愛しさを感じる。

最近、このように都市における野生植物の生育などが造りだした景観をアノニマス景観（デザインされていない景観）と呼びそれを研究する会もあるそうだ。人間の心には野生生物のたくましく生き生きとした営みが必要なのではないかと思う。できればこのような野生（自然）の営みと共に生きることができる都市空間を創出し、そこで暮らしたいものである。

（取締役副社長・逸見一郎）

里山の多様性 の保全と管理について

兵庫県立〈人と自然の博物館〉特別集中セミナー参加レポート……

里山」…最近少し気をつけていけば新聞、雑誌、テレビなどで耳にする言葉です。一般的な意味としては「山や森から続く農地があり、山で炭を焼き、また農業を営む地域の風景やその生活の場」と言い換えることができると思います。「ビオトープ」（生物の生活空間）と同じく環境にかかわる人々以外にも徐々に浸透しつつある（という願いを込めて）言葉です。その意味や過去から現在までの姿、また5年後、10年後、自分の目で確かめるのは不可能な何百、何千年後の姿を想定した、貴重な報告や考え方を今回のセミナーで聞くことができました。（大阪支社営業担当・中山香代子）

このセミナーは、兵庫県三田市にある兵庫県立〈人と自然の博物館〉において2月15日、16日の2日間にわたって行われました（私は1日目だけの参加でした）。大阪府高槻市在住の私は、JR高槻から神戸三宮（45分位）、阪急電車に乗り換え、また神戸電鉄に乗り換え、何と24個目の駅「フラワータウン」に到着するころにはすでにヘトヘトでしたが、プログラムの始まる10時には会場はほぼ満員の盛況でした。

第1日目は里山管理の方法ということで、7名の講師の方々がそれぞれフィールドとされている地域の里山の現状や管理、調査結果の報告を聞くことができました。当社大阪支社長の浜田も「東京都における里山管理」の題材で丘陵地公園における雑木林の調査及びモニタリング結果を元に里山管理の現状を発表しました。

私自身はまだこのようなセミナーに参加し、知識を身につけていく段階なので、我社の浜田が演台に立ち発表している姿を見て少し誇らしく感じた

同時に、ますます自分が「一般人だなあ…」と覚えてしまいました。

2日目は午後から主に地元兵庫県の里山の現状や環境教育にかかわる里山管理が題材となりました。

聞き終えて思うのは、それ以前には「里山」という言葉の意味を知っていただけたけれど、その存在の本当の重要性を知る手がかりを得たということです。森林生態学における森のシステムは少し私には難しく、いまだにぼんやりとしか理解できていない部分もあるのですが、ひとつ心にしっかりと感じたことがあります。

それは、人というのは山（先祖から神がつかさどってきた神聖なる場所）、そこから続くこんもりとした森や命をささえる川の流れ、そこにある変わらぬ日々の暮らしに原始的な心の安らぎがあることを知らず知らずどこかで気づき、求めているのではないかということです。

都市はどんどん広がっていきます。

私が生まれて育った大阪府吹田市の実家も、かつて裏に山があり、たんぼがあり、豚やニワトリを飼う農家でした。林業を生業とするほどの規模ではありませんでした。こじんまりとした里山の生活が十分にありました。特に裏山から続く竹林の質がすばらしく、たけのこの加工業は重要な収入源となっていました。

けれど今の姿はどうでしょう。日本万国博における山や田畑の国による買い上げに始まり日本初のニュータウン開発、ベッドタウン化、鉄道も道路も十分に整備されました。もともとそこに暮らし続けてきた人達の生活はあっという間に限りなく文化的に快適になりました。私の記憶の中にある小さな里山生活をそこにを見つけることはできません。たった30数年のあいだに…。

それならすべて昔がいいのか、過去に回帰すればいいのか…というのではありません。高度成長時代がもたらしたすべての事象を善と悪に分けてみたり、これまでに至るプロセスを議論することは、また別の機会に譲りたいと思います。

ここ数年、私たちが生きて行くために最も重要な〈環境〉に関するこのような催しが専門家だけではなく市民レベルまで広がってきているようです。今は「価値観」の見つめなおしの作業中ではないかと思うのです。その作業に参加できるということの意味や責任を考え、自分にできることは何なのかを見つめつつ、この仕事とかかわっていきたいと思います。

価値観の見つめなおし中

プログラム

●2月15日（土）里山管理の方法

1. 里山の現状～里山の群落分類について…武田義明（神戸大学発達科学部）
2. 池田炭の生産が続く北摂の里山の現状…赤松弘治（里と水辺研究所）
3. 東京都における里山管理…浜田拓（地域環境計画）
4. 大阪府における里山管理…木下睦男（大阪自然環境保全協会）
5. 神奈川県における里山管理…中川重年（神奈川県森林研究所）
6. 兵庫県における里山管理(1)…打浪久淳（兵庫県農林水産部林務科）
7. 兵庫県における里山管理(2)…追跡調査結果 山崎寛（神戸大学大学院）
8. 総合討論

●2月16日（日）環境教育としての里山管理とニュータウンにおける里山管理

1. 神戸市における環境教育としての里山管理…高石悟（神戸市環境局）
2. 宝塚市中山台における植生管理…原田玲似子（中山台ニュータウン自治会）・服部保（県立〈人と自然の博物館〉）
3. 三田市フラワータウンにおける里山の現状…矢倉資喜（ひょうご環境創造協会）
4. 三田市フラワータウンの里山の方向性…石田弘明（〈県立人と自然の博物館〉）
5. 総合討論

かつては炭の生産のために繰り返し伐採(関西では7～8年周期)されていた里山林。近年、里山林が伐採や落ち葉かきもされず手が入らないまま放棄され、常緑樹が多く侵入し種の多様性が低くなっているとよく言われます。種の多様性は本当に低くなっているのでしょうか？種の多様性が低くなれば昔のように林を伐採しなければならないのでしょうか？今回のセミナーではこれらの疑問にいくつかの答えが示されていたと思います。セミナーでの発表を紹介しながら私なりの考えを少し述べてみたいと思います。

大阪支社自然環境調査室 石山麻子

伐採が及ぼす影響

赤松氏(里と水辺の研究所)は現在も炭の生産の続いている北摂地方で伐採直後から放棄された林までをいくつかのステージに分け、植物の種組成(種の有無)、種の多様性(出現種数)にどのような違いがあるか調査を行っていました。調査の結果、伐採後のステージから放棄され長期間経過した林まで共通している種が多かったこと、出現種数も大きな差がないことを明らかにしていました。しかしながら、伐採後の年数が短い初期のステージには草原性、林縁性の種が多く含まれていること、種の有無には違いが認められないものの種の被度の違いはあったことが報告されていました。

このことは、管理を放棄したら種の多様性が低くなるとは一概に言えず、種の多様性を維持するには昔ながらの伐採するという管理が必要であるとは限らないことを示しています。少なくとも今回の調査が行われた林齢が30数年の林までは種組成に大きな変化がないので早急に伐採しなければということはないと思います。ただ、種によって管理を放棄されたことによる影響を受けやすいものとそうでないものがあり、それは、それぞれの種の繁殖様式や個体群維持のシステムと密接な関係を持つと考えられます。

例えば、木本類は個体の寿命が長く、影響は受けにくいと考えられますが、林床の草本類、特に種子繁殖によってのみ個体群を維持している種は開花、結実をして種子生産を行い、種

子の発芽がなければ種の個体群は維持できないので環境の変化により敏感であると考えられます。このような種は管理を放棄され上層木の陰になると、開花、結実をしなくなり、さらに、たとえ種子が散布されても落葉層の堆積により発芽できない等の影響を受けると考えられます。これは現在生育している個体が枯死すると、新たな個体の供給がない状態となり個体群そのものが消滅すると考えられます。

このように種によって影響の受け方は異なるので、影響の受けやすい種群を抽出し、その動向によって林の状況を判断するという方法も今後検討され行けべきと考えます。

高木環境林管理

山崎氏(神戸大学大学院)は現存する高木層は伐採せずに、低木層に密生するヒサカキ等の照葉樹、草本層に密生するネザサ類を選択的に伐採するという管理(「高木環境林管理」と名付けていました)を提案していました。さらに、「この管理が里山林の新しい管理方法になるか」というテーマで「この管理で夏緑広葉二次林として維持できるのか？」という調査、検討を行っていました。

調査の結果、「管理直後に侵入する実生の中心は夏緑広葉二次林要素の木本種なので夏緑広葉二次林として維持していく可能性は高まった。」と結論づけています。

しかしながら、これについてはかな

新しい時代の関わり方を

り疑問！と思いました。なぜなら、夏緑広葉二次林の主要構成種はコナラ、クヌギ、アベマキ、クリ等と思われませんが、調査地点7地点のうち管理前に実生の生育が認められず、管理後に実生が確認されたのはクリが2地点、コナラ、アベマキがそれぞれ1地点です。特に、コナラの優占する林でコナラの実生は確認されていません。この結果からだけでは調査した林がコナラ等の優占する夏緑広葉二次林として維持すると判断は出来ないと思います。かつての里山の管理では林を維持する方法として萌芽更新(高木層の優占種を伐採し萌芽させて林を維持する方法)によっていました。一方、「高木環境林管理」では実生更新(高木層の優占種の種子が発芽し成長し林を維持する方法)によって林を維持します。「高木環境林管理」が夏緑広葉二次林を維持するのに有効であると今回の調査結果からでは結論付けられず、今後さらに多くの林分での調査および種子がどのように供給され、どのように発芽し、定着していくかを明らかにすることが必要と思います。

とはいえ、「里山林が種の多様性を保ち、かつての里山林らしくなるには、かつて行っていた伐採が一番だがそれは経済的に無理」という大きな課題に「高木環境林管理」という新しい管理方法で新たな方向を示した事は大きな意義があると考えます。

また、里山林はかつては生産の場でしたが、現代では環境を良好にする場であり、かつて生産のために伐採していたのと同じ方法で管理するのは困難で、新しい管理方法が必要ではという発表も興味深く思いました。

今回のセミナーは「里山」という言葉をキーワードに、特に、管理という側面から様々な論議が行われ、有意義だったと思います。かつての管理方法に固執するのではなく、新しい時代の新しい里山林との関わり方を模索しなければと痛感した一日でした。

鳥類調査法

～その2～

前号では、鳥類調査法や調査者に必要な技術について、また、経験やセンスが調査結果に差をつけることがある全体的な話をした。

今回は引き続き、具体的な調査方法について紹介する。

■鳥類は、その他の生物の例に漏れず、環境の違いによって生息する種が違います。そのため、調査対象範囲における鳥類の生息状況を把握することは、その地域の自然環境を把握するうえで、非常に重要です。

自然環境調査で、鳥類を確認する場合は、姿と鳴き声から、生息種を識別します。鳥類は、雌雄の違いや季節、成鳥、幼鳥の違いによって体色の異なる種がある一方、姿の非常に似ている別種も少なくありません。しかし、その鳴き声、特に「さえずり」は、種ごとに異なった特徴があるので、生息種の識別では、鳴き声での確認が非常に重要と

なるのです。



■鳥類の調査法としては任意観察法、ルートセンサス法、定点観察法、古巣確認調査、夜間鳥類調査、呼び寄せ法などがあげられます。

当社では、調査目的にあわせて、調査方法を選び、必要に応じて他の手法と組み合わせ、よりよいデータを収集する事に努めています。ここでは、最も多く使われる任意観察法、ルートセンサス法、定点観察法の特徴を、それぞれ紹介します。

①任意観察法

任意観察法では、調査対象範囲にみられる様々な環境を網羅するように踏査し、確認された鳥類を記録する手法で、主に調査対象範囲の鳥類相を把握する事を目的として行われます。この手法では、調査対象範囲内の異なった環境を効率よく踏査し、植生の構造条件や採餌場所の条件などから、鳥類が多く生息する環境をいち早く判断する事が重要となります。このことが、調査対象範囲の鳥類相をより正確に把握することにつながるのです。このように、本手法は、調査員の専門的な知識や経験が要求されるのです。

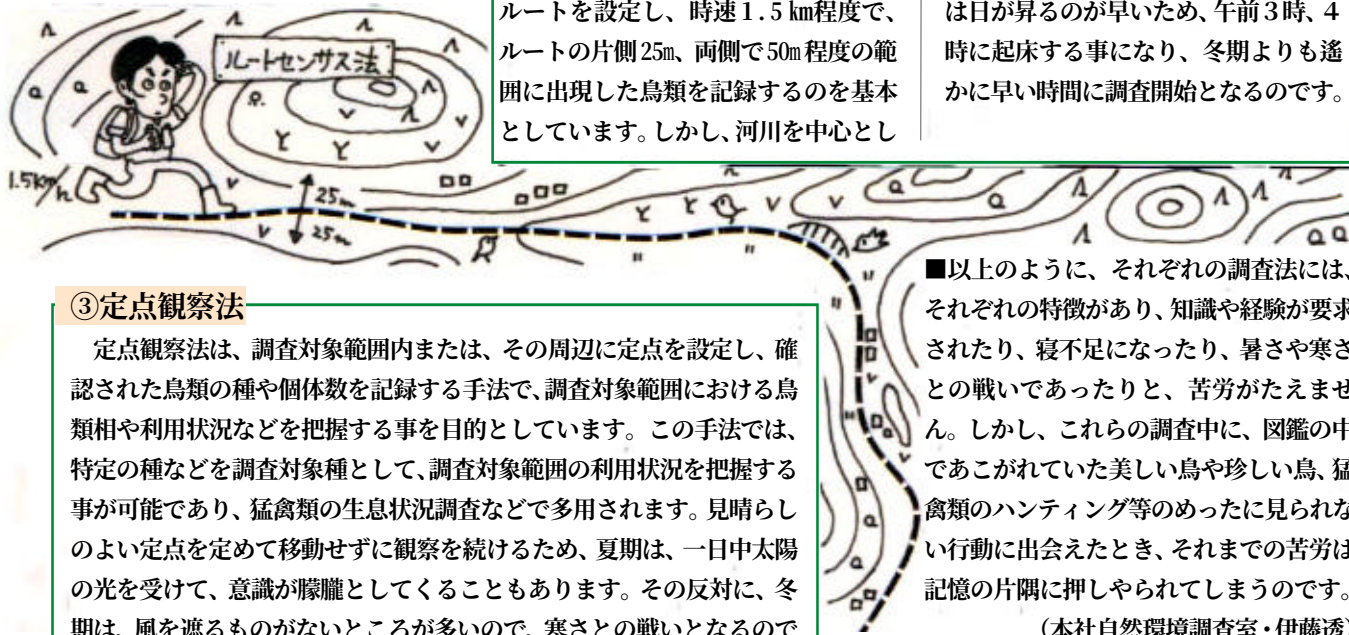
②ルートセンサス法

ルートセンサス法は、調査対象範囲の環境を網羅するようなルートを設定し、そのルート上を一定の速度で進み、ルート両側の一定範囲内に出現した鳥類の種名、及び個体数を記録する手法です。調査対象範囲の鳥類群集を定量的に把握する事が目的で、ある程度客観的な調査結果が得られます。しかし、調査対象範囲の鳥類相やある特定の種における生息状況などを把握するためには、任意観察法や、定点観察法などとの併用が必要となるのです。

ルートセンサス法を用いて調査を行う場合、当社では、2km程度の長さのルートを設定し、時速1.5km程度で、ルートの片側25m、両側50m程度の範囲に出現した鳥類を記録するのが基本としています。しかし、河川を中心とし

た水辺環境や湖沼などが調査対象範囲となる場合、踏査可能なルートを中心に調査を行うと、調査対象範囲の鳥相を正確に捉えられない場合などができます。このような場合には、調査目的や環境に合わせて適宜判断し、ルートの片側50mについてのみ調査を行うなどの工夫をしています。

また、本手法は、鳥類が盛んに鳴き交わす早朝の時間帯に行う事が多いです。このため、調査対象範囲が広く、センサスルートが数本設定される場合などには、連日、早朝からの調査が続き、寝不足気味になる事があります。特に、夏期は日が昇るのが早いため、午前3時、4時に起床する事になり、冬期よりも遙かに早い時間に調査開始となるのです。



③定点観察法

定点観察法は、調査対象範囲内または、その周辺に定点を設定し、確認された鳥類の種や個体数を記録する手法で、調査対象範囲における鳥類相や利用状況などを把握する事を目的としています。この手法では、特定の種などを調査対象種として、調査対象範囲の利用状況を把握する事が可能であり、猛禽類の生息状況調査などで多用されます。見晴らしのよい定点を定めて移動せずに観察を続けるため、夏期は、一日中太陽の光を受けて、意識が朦朧としてくることもあります。その反対に、冬期は、風を遮るものがないところが多いので、寒さとの戦いとなるので

■以上のように、それぞれの調査法には、それぞれの特徴があり、知識や経験が要求されたり、寝不足になったり、暑さや寒さとの戦いであつたりと、苦労がたえません。しかし、これらの調査中に、図鑑の中であこがれていた美しい鳥や珍しい鳥、猛禽類のハンティング等のめったに見られない行動に出会えたとき、それまでの苦労は記憶の片隅に押しやられてしまうのです。

(本社自然環境調査室・伊藤透)

植物調査物語

目指すは 牧野富太郎!? ...の巻



牧野富太郎

(1862~1957) 高知県生まれ
偉人

日本の植物の近代的分類学の基礎
を築いた学者。様々な苦難の中、独学
で植物学に取り組み植物分類学の
世界的権威となる。新種1,000種、
新変種1,500種以上の命名。標本は
60万点(なんと!!)に及ぶ



(原案◆本社自然環境調査室・井原寛人/イラスト◆飯塚要)



雑木林をつくる

人の手と自然の対話・里山作業入門

倉本宣・内城道興編著 / 定価 1442 円
発行＝百水社 発売＝星雲社

こ

この本は雑木林と仲良くなりたと思っている人に最適の入門書である。

前半は多摩ニュータウン（東京都多摩市）の雑木林と関わってきた人たちの姿がドキュメント的に語られている。雑木林を自分達の手で手入れしようとスタートし、悪戦苦闘しながらも雑木林でどんな風に楽しんできたかが生き生きと書かれている。

後半は「雑木林とのつきあいー21のキーワード」の章で「地形図から雑木林を探すには？」「健全な雑木林とは？」「雑木林の地主さんとのつきあい方は？」等、雑木林とつきあう上での様々なポイントを分かり易くまとめている。さらに雑木林の生き物についても植物、小鳥、土壌動物まで簡単な図鑑的な記載がある。

私が興味深かったのは雑木林の手入れを始めた当初、笹を刈るにしても非常に苦労しながらも「守らなければ、という肩ひじ張ったものでなく、われわれの庭、われわれの林を作る遊びをしよう」という考え方で会を進めて

いったという点である。かつて炭焼きという生産のために管理していた雑木林は過去のものであって、現在は現在を生きる私たちが新しい雑木林との関わり方、楽しみ方を見付けるときである。遊び、楽しみであるからこそ長続きするし、今までと違った新しい視点で雑木林を見つめることも出来ると思う。そういう点では「雑木林を管理する」という言い方も適当でない気がする。著者の言葉どおり、管理をしているのではなく「雑木林を作る遊びをしている」のではないだろうか。

巻末には全国の雑木林の再生・保全グループの一覧も載せられており、ひとりではなかなか出来ないが何かしたい人が、一歩踏み出す手助けとなるで

あろう。

また、この本は関東での実践をもとに書かれており、その他の地域では雑木林に生育、生息する種も異なり、また雑木林の管理の仕方も異なる。この本に述べられていることは、大筋では全国どこでも通じるが細かい所であてはまらない点もある。私が関西に住んでいるので特に感じるのかもしれないが、その旨一言欲しいと思った。

今、雑木林は新緑の淡く光る緑が日々濃い緑へと変化していく一年で私が一番好きな季節である。雑木林が大好きな私は、この本を読んで雑木林と遊べる人が増えることを願っている。
(大阪支社自然環境調査室・石山麻子)

本文中イラストより



◆著者紹介◆

●倉本宣（くらもと のぼる）1955年東京都生まれ。東京都庁勤務中、公園管理と自然保護の仕事に関わる。現在は明治大学農学部専任講師。著書『緑の景観と植生管理』（共著、ソフトサイエンス社）、『緑地生態学』（朝倉書店）『雑木林の植生管理』（ソフトサイエンス社）

●内城道興（うちじょう みちおき）1940年岩手県生まれ。会社員。著書『翔べ、オオムラサキ』（共著、講談社）『多摩市の野草』『多摩市の樹木』（編著、多摩市）自著、句集『次男坊』

「日本海重油回収ボランティア」に参加して

今年1月、日本海沿岸でおきた重油流出事故のニュースを聞いたとき、最初は他人ごとというか、よくあるニュースのひとつくらいにしか感じていませんでした。しかし1月中旬に偶然、タンカーの船首部分が漂着した福井県三国町での重油回収ボランティアに参加する機会があり、ほとんど興味本位で参加しました。しかし、実際現場に行き、重油に汚染された海を目の前にすると見学気分は吹き飛び、一刻も早くあの海を何とかしたいという衝動に変わりました。

現場に着いてまず驚いたのは、海の香りが全くせずに重油の匂いだけが充満していたことです。見た目はきれいな日本海を前にしながら重油の匂いしかなし、これは異様な光景で、とても違和感があると同時に衝撃を受けました。次に驚いたのは、海岸への重油の漂着の仕方です。現場は主に岩場でしたが、そこにある岩や小石すべてに重油がべったりと付き、小石の間やその下にまで入り込んでいました。簡単に重油が回収できるとは思っていませんで

したが、漂着してしまった重油があればほどひどいとは思いませんでした。これを見た瞬間、私は人間による海岸の重油回収が事実上不可能なことを悟りました。表面の重油は回収できても、小石の隙間に入り込んでしまったものまでは回収できません。

初日は天候が悪く、海に入っただけの回収はできませんでしたが、ボランティア本部への物資の搬入や整理を主にしました。

2日目は、三国町より東の砂浜で地元の自然保護団体の方々と共に、被害を受けた水鳥の保護と死体の回収を行いました。砂浜は、昨日の岩場と比べて重油の漂着は少量でしたが、どこまでいってもやはりその匂いが充満しており、生物の気配が全くしない不気味な「沈黙の海」となっていました。それは、まるで未来の海を見ているかのような気分でした。その日の午前中は、保護を必要としたり、死んでしまった水鳥を見つけることはありませんでした。午後になって、漁港の防波堤上で重油にまみれた水鳥を発見し

ました。その水鳥は防波堤の一番高い所で羽を大きく開き、重油を乾かそうとしていました。何度も羽をふり、また羽を広げるということを繰り返す姿が痛々しく憐れでした。ボートで近づいて保護しようとしたのですが、あと少しという所でその水鳥は飛び立ち逃げていってしまいました。10人近い人間がいながら水鳥1匹保護できないという無力感を、あの場にいた全員が味わったと思います。結局、水鳥の保護は、その鳥が動けなくなるほど衰弱するまで待つしかない様でした。

港の手前側では、道路に自動車が走り、家が建ち並んでいます。しかし、これらの文明の利器は、水鳥の保護や重油回収という作業には何の役にも立たない事を歯がゆく感じました。同時に私たちの文明の方向性は実は著しく偏っているのではないかという疑問も生じてきました。

その日別の場所で回収された、重油にまみれた水鳥の死体は、あまりにも無残でした。

(本社アルバイト・角間裕)

油汚染と海鳥



ウミスズメ科 ウトウ *Cerorhinca monocerata*
(京都府丹後半島琴引浜/1997.01.19撮影)

保護、または死体として運ばれた鳥は1307羽(3月17日環境庁発表)。生きて介護を受けたものはごくわずかで、大半は海上で息絶え岸に打ち上げられた。海中に沈むなどして失われた数を含めれば、実際の被害数はこの10～20倍にもなるという。

死体は、各県から東京港に送られてくる。ごく軽度なものから、ひと抱えもある重油塊と化した重度のものまで状態はいろいろだ。油汚染が、海鳥に与える影響ははかりしれない。体機能低下による餓死。食物連鎖起源の中毒。餌動物の減少による繁殖率低下。汚染個体の抱卵による卵や雛の死亡。つがい相手の死亡など、海鳥の苦難は今後何年も続くのである。

もう、新聞紙面でナホトカの記事を見かけることもほとんどなくなった。鳥のリハビリセンターも解散した。けれど、海鳥たちは、汚染された海でこれから繁殖のシーズンを迎えようとしている。失われた命を無駄にしないために、同じ事を繰り返さないために、私たちは、人間以外の生き物といつも環境を共有しているということを、この事故を通して再認識したい。

(日本ウミスズメ研究会・佐藤美穂子)

佐藤美穂子：96年春まで本社調査室に勤務。海鳥の生態に関心を持ち、日本ウミスズメ研究会に入会。海鳥調査を本業とするために退社。今回の事故では、被害推定調査を実施しており、現在も継続中である。

「ナホトカ号重油流出事故」(平成9年3月17日・「環境庁発表」より)

今年の1月2日に鳥根県隠岐島沖で、ロシア船籍のタンカー・ナホトカ号が沈没。その後、船首部分が漂流を始め、7日に福井県三国町に座礁。船内に残っていた重油が周辺府県の海岸に漂着し、付近の生物相や地元の産業に大きな被害を与えた。

事故から3ヶ月経過した現在も、油除去作業、調査等を継続して実施している。

環境庁等のインターネットのホームページで、関連情報を見ることができます。……環境庁・アドレス <http://www.eic.or.jp>



オオイヌノフグリ

春の事でした。自転車の荷台に私を乗せた祖父はカゴにスコップと植木鉢、そして軍手を積んで出掛けました。自転車で出掛ける事はよくあったのですが、その日はいつもと様子が違いました。何かを探しているようなのです。訊ねてみようとした時、自転車が止まりました。カゴの道具を取り出して祖父はそこに咲いている小さな青い花を植木鉢に移す作業を始めたのです。何かと思い覗き込んでみると、それは外でよく目にするオオイヌノフグリでした。珍しい訳でもなく、どこにでもあるその花を持ち帰り、大切に育てていた祖父の心境が私には理解できませんでした。15年以上前の話です。

あれから今までの間に何度もオオイヌノフグリを目にする事はありましたが、その場に立ち止まる事はなく、特に気にとめる事はありませんでした。

そんな中で、昨年市民向けの植物観察会に参加する機会がありました。『春を感じる』というテーマで、普段からよく目にする路傍雑草をメインに見ていく観察会でした。いつもなら「咲いている」程度の感覚しかなかったのに道の隅に咲いているオオイヌノフグリを見た

ある日のフィールド・ノートから

雑草ですが…

ツクサ



時、なぜかその場にふさわしく、存在価値のある貴重なものに感じたのでした。この時15年以上前の出来事が脳裏に浮かび、あの時オオイヌノフグリに目を向けていた祖父の心境が何となく漠然と分かったような気がしました。

なにかと外に出る事が増え、仕事で地方に行った時のことです。周囲は田圃ば

かりで今自分が何県にいるのか分からなくなってしまうぐらいにごくありふれた景色でした。その日の仕事が終わり、集合場所で人を待っている時でした。何気なく足元を見るとそこにツクサが咲いていたのです。

今までに何度も見たことがあり、この日の仕事でも何度か見ている筈なのに、これがツクサなのかと自分の目を疑ってしまう程綺麗で見とれてしまったのでした。

なぜ目にしていた筈なのに気が付かなかったのだろう、そう考えると、今までどこにでもあるものだから、とあえて見てみようとする感性を忘れていた自分がそこにいました。

オオイヌノフグリもツクサも特別珍しい植物でも貴重な植物でもなく、どちらかという雑草として扱われています。どこにでもあるような景色の中に、どこにでもあるような植物がある、それは当然な事かもしれません。でも景色の中に、雑草と呼ばれ注目される事の少ない種が1種1種存在しているからこそ、景観が成り立ち、残していきたい景色が出来上がっているのではないだろうか、そんな気が最近します。

(本社業務推進室・久保裕美)

4月上旬に新潟県の妙高高原へ行ったが、現地は例年よりも早い雪解け。気温が高く、毎日が雨か霧。期待していたハール・ボップ彗星を見ることができなかった。雪の中の彗星ウォッチングと洒落こみだったのに、...

5月でも、夕方の西天に明るさが衰えたハール・ボップ彗星が見られるとか。5月9日には、細くなった月と並ぶ彗星が見られるという。世紀末の大彗星の天体ショーを、見逃してなるものか。(中村)

東急大井町線が二子玉川園駅にさしかかる手前は「知る人ぞ知る」桜の名所だ。線路の脇すれすれまで枝を伸ばした染井吉野の花を、かなりまちかに見られるのだ。座席に腰掛け窓に背を向けている人たちに、心の中で「ほらほら見てみて」といいつつ首をねじまげ桜を見送る。時々、同じようにしている人がいる。よかったねいいもの見たねー、と思う朝のひとつ。(南谷)

News Letter N0.8 1997年4月

【発行】……………株式会社地域環境計画

●発行人……………高塚敏

●編集……………南谷佳世・中村兼吉・西邑恵子

■東京本社

〒154 東京都世田谷区桜新町2-22-3 NDSビル

TEL 03-5450-3700 / FAX 03-5450-3701

◆営業窓口……………逸見一郎

■大阪支社

〒569-11 大阪府高槻市古曽部町1-1-8

TEL 0726-84-3182 / FAX 0726-84-3184

◆営業窓口……………中山香代子・津田洋子